

祭りの海外遠征

— ロサンゼルス of 青森ねぶた —

阿 南 透*

はじめに

青森ねぶたとは、青森県青森市で行われる祭りであり、そこに登場する灯籠の名称である。2007年8月19日、そのねぶたが青森を離れ、アメリカ・ロサンゼルス of 祭り「二世ウィーク」に登場した。

実は青森ねぶただけでなく、祭りが本来行われる場を離れ、他の場所で演じられる例は意外に多い。しかし、こうした現象にはこれまであまり目を向けられることがなく、事例報告もほとんどなかった。そこで本稿は、祭りの移動という現象が何を意味するのかを考察するための準備作業の一つとして、青森ねぶた of ロサンゼルス遠征の様子を報告したい⁽¹⁾。

1. 青森ねぶた祭

1.1 概 要

青森ねぶた祭は、青森県青森市で毎年8月2～7日に開催される、日本を代表する夏祭りの一つである⁽²⁾。大きな人形灯籠が20数台パレードする行事で、古くからの伝統に裏打ちされているようにも見えるが、特定社寺と結びついた宗教行事ではなく、起源や由来も定かではない。民俗学の観点からは、災厄を人形につけて川に流す行事や、睡魔を払う「眠り流し」、盆の精霊を送る「精霊流し」などが一緒になった行事と考えられる。

1980年に国の重要無形民俗文化財に指定され、ねぶた本体の優れた芸術性が人々の目を驚かすものの、ねぶた本体は毎年新しく作られ、祭りが終わると棄てられる、一年限りの作品である。しかも、電球、蛍光灯、バッテリー、発電機、トラックのタイヤ・車軸など、新しい技術を積極的に導入し、新たなテーマをねぶた本体 of 題材として発掘するなど、創意工夫を凝らす一面がある。

似た行事は、青森県弘前市の「弘前ねぶた祭」、黒石市の「ねぶた祭」、五所川原市の「五所川原立佞武多」、それに秋田県能代市の「ねぶ流し」など、日本海側に数多くある。しかし、青森ねぶた祭がそれらの行事と異なるのは以下の点である。

まず第1に、青森ねぶたは、巨大な燈籠であるねぶた本体に加え、囃子、それにハネトと呼ばれる踊り子、の三つの要素から構成されている。特に大人数 of ハネトの存在は、他では見られない。

第2に、現在の青森ねぶた of 本体は、針金の枠組に紙を貼った人形燈籠を、中から電球で照らしたもので、歌舞伎の名場面、日本や中国の歴史・伝説などから題材を取り、人形一つないし二つ（まれに三つ以上）から構成される。大きさは、大型ねぶたの場合、高さ5メートル（台車を含む）、幅9メートル、奥行き7メートルという、横長の平べったい空間に収めなければならない。幅に比べて高さが低いため、重心の低い、このような姿勢が特徴である⁽³⁾。

第3に、ねぶた本体を載せる台車はリヤカーが発展し大型化したものである。トラックのタイヤを用い、車輪は二輪で、引き綱を用いずに引き手と呼ばれる前後にある棒を押して動かす。このた

2007年11月30日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科教授 民俗学

め、急停止や旋回、上下動など、機敏な動きが可能である。これは他のねぶたや、全国各地の山車・曳山・屋台にない特徴である。

第4に、ねぶたを出す団体（運行団体）は、大型ねぶたについては、町内会などの地縁組織が減少し、企業や公共団体が多くなっている。これは1台2,000万円と言われるほど経費が高額化したため、地縁組織には運行費用を出せなくなったためである⁽⁴⁾。

第5に、青森市では、大型ねぶた制作者としての「ねぶた師」という専門家の地位が確立している。現在、青森市では22台の大型ねぶたのうち一台は市民有志による自主制作であるが、他の21台を12人のねぶた師が制作している。ねぶた

師は、運行団体から大型ねぶた制作を受注し、費用の支払いを受けてねぶたを制作する。ねぶた師はそれぞれ、数名から十名弱のスタッフ（弟子や電気の専門家）を抱え、紙貼りに主婦のアルバイトを雇うなど、制作集団を率いている。各団体の制作者名は毎年の新聞やパンフレットに掲載され、市民には周知のものである。

第6に、莫大な数の観光客がやってくるのも青森市ならではの特徴である。青森ねぶたは、1962年頃に仙台七夕まつり、秋田竿燈とともに「東北三大祭」を名乗り、観光客の誘致に力を入れた。その後もさまざまな経緯があり⁽⁵⁾、近年では6日間の期間中にコンスタントに350万人以上を集めている。

表1 青森ねぶたの海外遠征

年	月	国	都 市	行 事	制 作 者
1963	4月	アメリカ	ホノルル	松竹歌劇団ハワイ公演（舞台装飾）	佐藤伝蔵
1976	2月	フランス	ニース	国際カーニバル	石谷 進、千葉伸二
1978	12月	ブラジル	サンパウロ	ブラジル移民70年祭・第5回東洋祭り	石谷 進
1980	2月	アメリカ	ホノルル	桜まつり	石谷 進
1980	10月	台 湾	台 中	国慶節パレード	鹿内一生
1982	8月	アメリカ	ホノルル	まつりインハワイ	
1984	8月	アメリカ	ホノルル	ホリデーインハワイ	石谷 進
1986	9月	アメリカ	ホノルル	アロハ・ウィーク	石谷 進
1986	11月	イタリア	フィレンツェ	ジャパンウィーク	千葉作龍
1988	10月	中 国	北 京	日中平和友好条約締結10周年記念事業	鹿内一生
1989	9月	ベルギー	ブリュッセル	ユーロパリア 89 日本祭	石谷 進
1990	11月	香 港	香 港	区局節	千葉作龍
1991	9月	イギリス	ロンドン	ジャパンフェスティバル	石谷 進
1992	9月	中 国	北 京	ジャパンウィーク	渋谷一擲
1993	8月	アメリカ	ニューヨーク	（JAL ニューヨーク支店に面を飾る）	福井祥司
1996	5月	デンマーク	コペンハーゲン	EU ジャパンフェスト	石谷 進
1996	9月	ハンガリー	ブダペスト	建国 1200 年祭	竹浪魁龍
1998	3月	アメリカ	ホノルル	第4回ホノルルフェスティバル	石谷 進
1999	3月	アメリカ	ホノルル	第5回ホノルルフェスティバル	石谷 進
2000	3月	アメリカ	ホノルル	第6回ホノルルフェスティバル	石谷 進
2001	11月	イギリス	ロンドン	大英博物館に展示	北村 隆
2005	9月	韓 国	ソウル	日韓友情年 2005～日韓のお祭り	穂元鴻生
2007	8月	アメリカ	ロサンゼルス	二世ウィーク	竹浪比呂央

以上、青森市のねぶたの特徴を列挙したが、これらはいずれも戦後の青森ねぶたにのみ見られる特徴である。

1.2 過去の遠征

ねぶたが他からの招待を受け、出かけていくようになったのは戦後のことである。これを青森では、ねぶたの「遠征」と呼んでいる⁽⁶⁾。

ねぶたの遠征は国内・国外を問わず数多く行われてきた。このうち 23 回あった海外遠征を表 1 にまとめた。

最初の海外遠征は、1963 年のハワイ遠征であった。これは松竹歌劇団のハワイ公演に舞台装飾として用いられたものである。松竹歌劇団は、1961、62 年の 2 回、東京公演にねぶたを使用しており、それが好評であったことからハワイ公演にも取り入れたようだ。舞台用なので幅 5 メートル、高さ 2.5 メートルの小型であった（『東奥日報』1963.2.14）。公演終了後は、ホノルルの白木屋に展示された。

海外で実際に運行したのは、1976 年、フランス・ニースの国際カーニバルに招かれたのが最初である。ねぶたは制作者 9 人を現地に派遣し、17 日間で制作した。パレードではねぶたを横向きにトラックに積み、6 キロメートルのコースをそのままの形で進んだという。日本から 2 週間南欧各地を観光し、そのうち 2 日間ニースのカーニバルにハネトとして参加するツアーを組んだところ参加者が増え、ハネトは総勢 272 人という大部隊になった。

ニース遠征の成功をきっかけに、世界各地への遠征が始まる。表 1 に見るように、ほぼ 1 年半に 1 回の計算になる。

遠征では、ねぶた師とスタッフが現地に 2～3 週間滞在して、ねぶたを現地制作することが多い。ねぶたの大きさは現地の法規や道路事情に合わせるが、青森のものより少し小さくなることが多い。

ねぶたを招聘する理由は、日本を紹介するイベント、あるいは日本に関係のある祭りの中で、日本を代表する祭りとして紹介するというものが多い。これも、単に日本で有名というだけでなく、

ねぶた本体の芸術性、囃子やハネトの迫力が世界的に通用するものとして認められているからであろう。こうして、青森ねぶたは世界に広く知られる行事となりつつある。

なお、海外からのねぶたの招聘依頼は非常に多いという。しかし費用、現地の法規、道路事情、交通事情等、様々な事情で実現には至らないケースも多いのが実情である。

2. ロサンゼルス日本人・日系人

2.1 日系人・日本人の多様性

次に、今回の遠征の舞台となったロサンゼルスと日本人のかかわりを見ておこう。

北米では、19 世紀末から西海岸の主要都市に日本人が少しずつ集中して住み始め、日本人街とでも言うべき区域を形成した。ロサンゼルスでは、のちにリトルトーキョーと呼ばれる一角がその典型であった。1885 年に元船乗りが、East First street にほど近い Los Angeles street にレストランを開いたのが、日本人集住のきっかけという。1890 年代の終わりには、ダウントウンに 100 人を超える日本人が住むようになる。そして 1906 年、サンフランシスコ大地震で家を失った日本人が続々と南カリフォルニアに移住した [米谷他 1987：pp.42-43]。

1913 年、カリフォルニア州で外国人の土地所有を禁じた土地法が成立し、1924 年には日本からの新たな移民を禁じた移民法が成立する。こうした中で、日系移民の都市集中が加速する。この結果、当時急速な成長を遂げつつあった南カリフォルニアの拠点都市ロサンゼルスには日系人のコミュニティが次第に姿を現していった。1930 年の外務省『在外本邦人国勢調査報告』によれば、カリフォルニア州南部には 3 万 300 人の日本人が居住し、うち 2 万 2,850 人がロサンゼルスとその周辺に集中していた [町村 2003：172-173]。1930 年代の南カリフォルニアは、ハワイを除けば、アメリカ本土で日系人の最大の集中地帯であった。

第二次世界大戦中の強制収容によって、ロサンゼルスの日系人コミュニティは完全に消滅する。

しかし、戦後再びロサンゼルスに戻った日系人はコミュニティを再建していく。1949年頃には、リトルトーキョーが日系人の中心地として復活を遂げた〔米谷他 1987：p. 112〕。

そして現在、日系人は三世～五世の時代になっている。もはや日本語を解さない者が大半である。

高度成長期以後、日本企業の対米進出が本格化すると、西海岸の拠点都市ロサンゼルスには大企業の支店が集結し、数多くの駐在員が長期滞在者として居住し始める。とりわけ 1980 年代には、貿易摩擦と急速な円高の進行により、日本企業の海外直接投資が激増する。電機・電子、自動車関連を主力とする製造業に加え、折からの日本・南カリフォルニア双方の好景気に支えられて、建設・不動産や各種サービスなどの新分野の企業進出が激増した。そして 1991 年に進出企業数のピークを迎える。それに歩調を合わせるかのように、在留邦人数も過去最高の 37,693 人（うち長期滞在者 21,012 人）を記録する〔町村 2003：174-175〕。

また、ロサンゼルスには戦後に日本から移住した者、留学後に職を得た者、駐在員として働いた後に会社を辞めて独立した者など、永住権を得た新たな定住者が増加している。これらの人々を、戦前に渡米した「一世」⁽⁷⁾と区別して「新一世」、その子どもを「新二世」と呼ぶこともある。

さらに、観光客、ビジネス旅行者、留学生など、移住を目的としない「非移民」として入国したものの、非合法な就労に従事しながら長期滞在をする若者たちがいる。特にロサンゼルスには、日本食レストラン、スーパー、ビデオレンタル店、衣服や雑貨を扱う商店、観光業など、日本人を対象とするか、日本と関連のある小規模な商店や企業が数多くある。そうした場所で若者たちがパートタイム就労している⁽⁸⁾。

このように、ロサンゼルスを中心とする南カリフォルニアには多様な日系人・日本人が存在する。1990 年国勢調査におけるロサンゼルス郡の日系人口は 132,261 人、うち家庭内言語が日本語なのは 63,921 人〔町村 2003：173〕であるという。すなわち、その差の 68,340 人の多くは、英語を家庭内言語とする日系二世以下のアメリカ人であ

り、日本語を家庭で話す者の多くは「新一世」「新二世」と思われる。これに対し日本側の統計である、外務省『海外在留邦人数調査統計』によれば、ロサンゼルス地域の在留邦人数は、1991 年に 37,697 人で、うち「長期滞在者」は 21,012 人である〔町村 2003：175〕。もっとも、在留登録をしていない日本人も多く、「地元のメディア経営者など情報通によれば、ピーク時で約 7～8 万人の日本人が暮らしていた」〔町村 1999：215〕という。

しかも、「広義の『日本系』コミュニティの各層は相互に無関係であることが多く、意識面でも 1 つの集団を構成しているとは言い難い」〔町村 2003：173〕という指摘もあり、Japanese として外部からはひとくくりにされがちな人々とはいえ、内実は多様である⁽⁹⁾。

2.2 リトルトーキョー

リトルトーキョーとは、ロサンゼルス郡のダウンタウンに位置する、かつての日本人集中地区を指す名称である。具体的には、北は E. First St., 南は E. Third St., 東は Alameda St., 西は Los Angeles St. によって区切られたエリアがほぼそれにあたる。

1930 年にはロサンゼルス郡の日系人口は約 35,000 人、州内最大の集積地（州内日系人の 36 %）となった。この時期、リトルトーキョーは日系の諸組織の本部や施設が置かれるエスニック・コミュニティのフォーカル・ポイントとして機能した。また、日系の各種商店、ホテル、日本式風呂屋、各種サービス業などの営業施設の集積もさらに進み、全米でも最大の日本人町として栄えた〔杉浦 1998：892-893〕。

戦争中の立ち退きにより日系人コミュニティは一時的に消滅した。しかし 1949 年頃には回復したという。日系人の祭り「二世ウィーク」が復活するのもこの年である〔米谷他 1987：p. 112〕。

しかし、ロサンゼルス市の行政地区拡大、建物の老朽化、若い世代の郊外への移住等の理由に加え、商業地としての活性化も目的として、1970 年末から再開発が進む。その結果リトルトーキョーは、

「全米最大の日系エスニック・タウンとして存続し、銀行、オフィス、各種小売店、娯楽施設、レストラン、各種コミュニティ施設、宗教施設などが狭い面積の中に集中する特異な文化・社会空間としての性格を鮮明にしてきた」〔杉浦 1998：902〕。

現在、リトルトーキョーを歩くと、日系高級ホテル、ショッピングモール、日系人の集まる宗教施設、保存・修景された歴史地区⁽¹⁰⁾、全米日系人博物館、日米文化会館、高齢者用アパート、パブリックアート（二宮金次郎像、アジア風のやぐら、日系文化を表現する壁画）が集中し、商店には日本語看板が氾濫する。「日系」のシンボリックな意味を持つ存在が、この地域を特徴づけている。

このようにリトルトーキョーは、日系人にとってシンボリックな地域ではあるものの、現在では、ロサンゼルスに住む日系人・日本人が決してここに多く居住するわけではない。日系人や新一世はダウンタウンを離れて郊外へ移住し、駐在員は、トランス、ガーデナーを初めとするサウスベイ地区や⁽¹¹⁾、オレンジ郡に属するアーバイン地域などに集住している。

2.3 二世ウィークの歴史

二世ウィーク⁽¹²⁾は、商業面で衰退の傾向にあったリトルトーキョーの活性化を目的として1934年8月に始まった祭りである。

『南加州日本人七十年史』は、開始の経緯を次のように述べている。

「当初は羅府小東京の日本人小売商組合が夏枯れ時の日本人町繁栄策の一つとして1932、3年から音頭行列を始めたのが動機となり、1934年から市民協会が中心となって、二世が実社会に乗出す第一歩と二世自体の団結強化をはかるため初めて『二世週祭』として同年8月16日から18日の三日間に行われた」〔南加州日本人七十年史刊行委員会編 1960：680〕。

ここに見られる一世と二世との関係を、北脇実

千代はもう少し具体的に述べている。当時のリトルトーキョーは全米最大の日系人コミュニティであった。しかし、青年期を迎えた二世は、アメリカ主流社会の生活になじんでおり、リトルトーキョーという限られた環境の中で買い物をする必要性を失っていた。そこで、リトルトーキョーで商業を営む一世を中心とした日系人が、顧客の獲得を目指して発案したのがこの祭りであった。主催は日系市民協会の二世たちに回ってきた〔北脇 2004：61〕。すなわち、リトルトーキョーの活性化に加え、二世をリトルトーキョーに惹きつけるとともに実社会に乗り出す訓練の機会として、一世が二世にイベントの実行を任せたのである。「二世ウィーク」という名称もここに由来するのであろう。

第1回の内容については、「商人たちは人気商品のバーゲンセールを行う。リトル・トウキョーに六つある裁縫学校の生徒たちが、自分たちのデザインした服の特別ファッションショーを催し、その会場の古びたユニオン協会には千五百人がおしかけた。相撲、剣道、柔道の各トーナメントが熱戦を繰り広げ、一番街を練り歩く大規模な『音頭』がフェスティバルを盛り上げれば、二世の組織委員会は“のぼり”を翻して行進する」〔米谷他 1987：p. 95〕という記述がある。

このように、二世ウィークの内容は日本的なものの強調が前面に押し出された。これは、一世を喜ばすと同時に白人の客を呼び寄せる効果があった。その一方で、日系人に対する風当たりを避けるためにも、アメリカ化した日系人の姿を示す必要があった。そうしたことから、第2回からはアメリカ的な行事であるビューティーコンテストを採用し、二世クイーン・コンテストが始まった〔北脇 2004：63-64〕。また第2回には、在米40年のパイオニア敬老会を催し、先駆者たちに敬意を表する行事を取り入れた〔南加州日本人七十年史刊行委員会編 1960：680〕。

こうして、「出し物としては、生け花、茶の湯、武道、盆踊り、ファッションショー、クイーンの選出と参会者の表彰、美術工芸展、タレントショー、パレードなど盛りだくさんで、当時も現在も基本的に変わっていない。当時の企画担当者に先見の

明があったということだろう」[ベフ 2002：168-169] という行事が続いていく。

なお、戦前の二世ウィークについて、「リトルトーキョー最大の祭典であり、南カリフォルニア全体の日系人社会の存在意義を一年ごとに確認する一大イベント」であり、「日系人社会内部の年中行事としては定着したが、外部者の参加はわずかだった」[ベフ 2002：168] という評価があることを紹介しておく。

戦前の二世ウィークは 1941 年まで続き、戦後は 1949 年に復活する。「その行事も戦後は逐年大がかりとなり、ボーリング、演芸会、柔剣道大会、女王戴冠式、舞踏会、ベビーショー、生花、茶の

湯展、ターレントレビュー、ゴルフ、カーニバル、音頭行進、テニストーナメント、野球試合、それにパイオニア表彰敬老会など多彩をきわめ」[南加州日本人七十年史刊行委員会編 1960：680] たという。現在も、この時代からさほど内容は変わっていないというのが私の印象である。

2.4 現在の二世ウィーク

ここでは、2007 年を例に、現在の二世ウィークの様子を紹介しよう。まず、7 月 15 日の開会式から 8 月 26 日の閉会式までの全行事を表 2 にまとめた⁽¹³⁾。実に多様な行事が長期にわたって開催されていることがわかる。

表 2 第 67 回二世ウィーク行事内容

Event	Date	Location
Nisei Week Hoops Tournament	June 22-24	Whittier High School
Opening Ceremonies	July 15	Japanese American National Muesum
Nisei Week Baby Pageant	July 21	JACCC Plaza
Nikkei Games	August 4-19	CSULB Pyramid
OC Sansei Singles Dinner	August 4	Paul's Kitchen
Karate Exhibition and Tournament	August 11	California Institute of Technology
Beikoku Karaoke Kohaku Utagassen	August 12	JACCC
Cultural Exhibits	August 18-26	Throughout Little Tokyo
Entertainment on the JVP Stage	August 18-26	Japanese Village Plaza
Tofu Festival	August 18-19	San Pedro St
California Shindo Muso Ryu	August 18-19	JACCC Plaza
The 9 th Annual Summer Courtyard Kids Festival	August 18	Japanese American National Muesum
Coronation Ball Golden Circle Dinner	August 18	New Otani Hotel & Garden
Coronation Ball	August 18	Japan American Theater
Sumo Tournament	August 19	New Otani Hotel & Garden
Car Show	August 19	100 Alameda St
Queen's Reunion	August 19	Japanese American National Muesum
Sumo Demonstration	August 19	JACCC Plaza
Martial Arts Demonstration	August 19	JACCC Plaza
Cosplay Contest	August 19	JACCC Plaza
Nisei Week Grand Parade	August 19	Route through Little Tokyo
Nisei Week Awards Dinner	August 20	New Otani Hotel & Garden
Nisei Week Pioneer Luncheon	August 22	New Otani Hotel & Garden
Anime Festival	August 25-26	Little Tokyo Shopping Center
Street Arts Festival & Carnival	August 25-26	San Pedro St
Japanese Student Network (JSN) Matsuri	August 25-26	Weller Court
Elder Law Seminar	August 25	Seinan Senior Citizens Center
Next Generation Remix Concert	August 25	JACCC Plaza
Taiko Gathering	August 26	JACCC Plaza
Nisei Week Closing Ceremonies & Ondo	August 26	1 st Street

これらの行事のうち最大のものが、19 日に行われる Grand Parade である。単に二世ウィークと言えばこのパレードを指すほどである。2007 年のパレードの内容を表 3 にまとめた⁽¹⁴⁾。70 もの団体・個人がリトルトーキョーを練り歩くパレードなのである。

パレードに登場する団体の特徴をまとめてみよう。まず第 1 に、現在の日系社会の重要人物が登場する。日系諸団体の長、全米日系人博物館や日米文化会館の館長などである。また、日本人社会の重要人物として総領事が登場する。二世クイーンが登場するのは当然であるが、他都市から来た

同様の女性たち、すなわちハワイ、シアトル、サンフランシスコのクイーンたちが登場する。

第 2 に、日系社会の功労者を表彰するという一面がある。パレードの先頭に近い位置で、第 2 次世界大戦で 442 部隊に加わった退役軍人たちが登場する。また、その他の功労者たちが Grand Marshal, Parade Marshal, Honorary Parade Marshal, Nisei Pioneer, Nikkei Parents of the Year といった名称で登場する。

第 3 に、ロサンゼルス郡の諸都市とつながりのある日本の姉妹都市の代表が登場する。名古屋市（ロサンゼルス）、芦屋市（モンテペロ）、那智勝

表 3 第 67 回二世ウィーク Grand Parade の内容

1 Los Angeles Police Department Motorcycle Drill Team	32 Montebello-Ashiya Sister City Association
2 Nisei Week Flags	33 Tatsuhiko Wakao/President of JCC
3 100th/422 nd Veterans Association	34 Pure 02 Association/Kazuhiko Fujii Vice President
4 Nisei Veterans Coordinating Council/Garfield HS	35 Colegio de Bachilleres
5 Nisei Veterans Coordinating Council	36 Commander Terry Hara/Los Angeles Police Department
6 Banning High School Marching Band	37 Monterey Park Nachikatsuura Sister City Association
7 Jack H. Naito/Grand Marshal	38 Ondo Dance/Awa Odori
8 Yoshino Inden Deputy Mayor/Nagoya Japan	39 Toshimasa & Harue Yutani/2007 Nikkei Parents of the Year
Eric Garcetti Los Angeles City Council President"	40 Shinsei & Hisako Hokama/2007 Nikkei Parents of the Year
9 Ondo Dance/Hanayagi Rokumine	41 Gary Yamaguchi/Mayor/City of Alhambra
10 Ondo Dance/General Public Ondo Dancers	42 Nisei Week Anime Festival 2007
11 Float/Azumazeki Oyakata Parade Marshall	43 Japanese American Cultural Community Center
Chikara Daiko of Centenary United Methodist Church"	44 Japanese American National Museum
12 Kazuo Kodama/Consul General of Japan	45 Irene Hirano/President/JANM
13 Takashi Yamada Executive VP Port Authority Nagoya	46 Ellen Endo/President/Little Tokyo Business Association
Kaylynn Kim Commissioner Port of Los Angeles"	47 Trudy Nodohara/Little Tokyo Lions Club
14 Troop 12 Boy Scouts of America	48 West Covina & Otawara Sister City
15 Keith Inatomi/President/Nisei Week Foundation	49 Lane Nishikawa/Gina Hiraizumi/"Only The Brave"
16 Councilwoman Jan Perry Los Angeles City Council	50 Jun Fukushima/Nisei Pioneer
17 Float/2007 San Francisco Cherry Blossom Festival	51 Edward I. Koizumi/Nisei Pioneer
18 Ondo Dance/Nippon Minyo Kenkyukai-Kawamura Hoshen	52 Bishop Taisen Miyata/Nisei Pioneer
19 Ondo Dance/Nippon Minyo Kenkyukai-Emil Hojoen	53 Tak T. Nishi/Nisei Pioneer
20 Dick Morgan/Nisei Week Baby Show Contest Emcee	54 Shoichi Sayano/Nisei Pioneer
21 Train/Nisei Week Baby Show	55 Tamio Uyemura/Nisei Pioneer
22 Rissho Kosei-Kai of Los Angeles	56 Ondo Dance/Tanachi Ohayashi-Kai
23 Supervisor Michael Antonovich/Los Angeles County	57 Ondo Dance/Student Ondo Dancers
24 Sheriff Lee Baca/LA County Sheriff's Department	58 Yasuyoshi Suzuki/Chairman Business & Administration
25 Trolley/2007 Greater Seattle Japanese Community	59 Koyasan Drum & Bugle Corps
Queen & Court	60 Japanese American Optimist Club
2007 Miss Chinatown Queen & Court	61 2007 Nisei Games
Miss Korea Southern California 2007 Court	62 Tadashi Kota/Chairman/Union Church of Los Angeles
Darin Furukawa-Samurai Store Inc.	63 Rev Mark Nakagawa/Centenary United Methodist Church
Mika Tarao-Nagoya Convention & Visitors Bureau"	64 Nori Nishida/Orange Coast Optimist Club
26 Los Angeles Nagoya Sister City Affiliation	65 Gerohe Takahashi/St. Francis Xavier Chapel
27 Ondo Dance/Okinawa Association of America Inc.	66 Float/2006 Nisei Week Japanese Festival Queen & Court
28 Float/55th Hawaii Cherry Blossom Festival Queen & Court	67 2007 Nisei Week Car Show produced by Ken Miyoshi
29 Assistant Chief David Yamahata City of LA Fire Department	68 Float/2007 Nisei Week Japanese Festival Queen & Court
30 Ondo Dance/LA Beat	69 Mikoshi-The Rafu Mutsumi Kai
31 Huell Howser/Parade Marshal	70 Float-2007 Aomori Nebuta festival

浦市（モンテレー）などである。

第4に、日系を象徴するような芸能が登場する。Ondo Danceの名称で数多く登場する民踊団体（阿波踊りを含む）、太鼓⁽¹⁵⁾、神輿などである。このような「伝統的」なものだけでなく、新しいものとして、アニメのキャラクターに扮した行列があった。

第5に、中国系、韓国系のミスが参加している。同じアジア系アメリカ人としての連帯の現れであろう。

2007年には、こうしたパレードの最後にねぶたが登場したのである。

3. ロサンゼルス側の準備

3.1 発 端

ねぶたをロサンゼルスに招聘するプランを考え出したのは、ある日本企業の前ロサンゼルス支店長T氏である。T氏は2004年に二度目のロサンゼルス勤務となった際、リトルトーキョーの衰退に驚き、人の流れを取り戻すためにもねぶたをロサンゼルスの人々に見せたいと考えたという[Los Angeles Times 2007.8.18]。T氏は以前に青森での勤務経験があり、ねぶた運行にかかわった経験があったため、青森のねぶた関係者とのつながりがあった。

T氏は、ロサンゼルス在住の企業駐在員にこのプランを呼びかけたところ賛同を得た。そしてロサンゼルスねぶた誘致委員会を結成し、2005年10月から青森ねぶた祭実行委員会⁽¹⁶⁾との折衝を開始した。

誘致委員会では、ねぶたを誘致する目的として、

1. ロサンゼルス、リトルトーキョーの活性化
2. 南カリフォルニア州への青森県生産物の販路拡大
3. 南カリフォルニア州からの青森への観光客誘致

の3点を掲げていた。またこの時点で、ロサンゼルス日本国総領事館、日本貿易振興機構、国際観光振興機構、全米日系人博物館、国際交流基金の

後援を得ていた。しかし、この時点では運行の時期は決まっていなかった。

つまり、ねぶたの招致は、二世ウィークの一企画として始まったのではなく、青森ねぶたをロサンゼルスに呼ぶこと自体を目的として、駐在員主導でスタートしたのであった。

誘致委員会からの問い合わせに対し、青森側は行事の意義を認めるものの、経費は招聘側で負担することを条件とした。また運行に関する条件、計画の問題点などをロサンゼルス側に伝え、協議を続けることとした。その後、ロサンゼルス側から2005年12月と2006年8月の2度青森を訪問し、青森観光コンベンション協会と直接協議して問題点を解決していった。青森側からも、2006年10月に3名がロサンゼルスを事前視察し、制作場所、運行コース、現地関係機関の協力体制を確認した。

この間、2006年7月にはねぶた招致の実現可能性が高まったと判断し、ロサンゼルス関係者は「ロサンゼルスねぶた実行委員会」を結成した。「誘致」から「実行」へと一段階進んだ瞬間であった。

3.2 実行委員会の結成

ロサンゼルスねぶた実行委員会は、結成後ただちに具体的な準備を開始した。結成時点での最大の問題点は日程であった。青森側は10月を希望した。青森ねぶた祭は8月上旬開催のため、ねぶた師は春～夏には長期間青森を離れられない。9月からねぶた師がロサンゼルスに滞在して1ヶ月で制作し、10月に実施というのが青森側の考える最善のスケジュールであった。

ロサンゼルス側は10月案も検討したが、8月中旬に開催される二世ウィークへの招聘が望ましいとの結論に至った。その理由は、

- ・他の時期に単独イベントとして行う場合、日系人からの協力や、交通規制等に警察や地元商店会からの協力が得られるとは限らない
- ・60年を超す歴史を持つ二世ウィークのパレードは、交通規制等の警察の協力体制が万全である

・ロサンゼルス総領事の方針として「駐在員あるいは新一世として当地に居住している日本人と米国生まれの日系人の交流の活発化」があり、日系人との共同イベントを期待しているというものであった。

このため青森側で再検討した結果、ねぶたを青森で制作したのち分解、輸送してロサンゼルスで再度組み立てる案が浮上した。この方法なら、8月20日以降であれば実施可能であるという。

このためロサンゼルス側の実行委員会では、二世ウィーク実行委員会に、パレードへの参加を申し込むとともに、8月12日に予定されていた2007年のパレードを1週間遅らせるよう要請した。二世ウィーク実行委員会でもねぶたの重要性を理解して、8月19日への変更を了承した。それだけでなく、ねぶたを見るのは夜が相応しいので、パレードの開始時刻も遅らせることとなった。

この決定を受けて12月6日に第2回ロサンゼルスねぶた実行委員会が開かれ、準備が本格的に始まった。この時点での必要経費の見積もりは24万ドルであり、協賛金の形で企業から集めることとした。また、必要な作業が明示され、実行委員の役割分担が決まった。

2007年2月8日の第3回実行委員会では、会長、副会長が承認され、役割ごとに小委員会を作り準備を進める運営体制が本格的に動き出した。3月9日の第4回実行委員会からは、16の小委員会（青森連絡、二世ウィーク連絡、予算・会計、スポンサード、ねぶた小屋連絡、台車製作、ねぶた輸送、ねぶた小屋警備、催事保険、PR、ハネト用マニュアル作成、運行、打ち上げ、VIP・スタッフ旅程、スタッフ食事、ボランティア）がそれぞれ活動を進め、月1回の実行委員会で報告するという進め方が確立した。

この段階でねぶたは二世ウィークパレードの一企画になった。従ってねぶたの運行を、二世ウィーク実行委員会が直接担当する進め方もある。しかし今回は、ねぶた実行委員会を二世ウィーク実行委員会の下部組織と位置づけるが、別個に会合を開いて運営を進め、連絡係として設けた「二世ウィー

ク連絡小委員会」が二世ウィーク実行委員会に説明・調整するという形を取った。三世中心の二世ウィーク実行委員会と、駐在員中心のねぶた実行委員会が役割分担して作業を進めるという「分節化」は、期限の限られた活動を円滑に進める上で有効であったと思われる⁽¹⁷⁾。また、二つの実行委員会をうまくつなぎ、関係を円滑にする人々が存在したことも幸いであった。

人数の上でねぶた実行委員会の中心を占めるのは駐在員である。このため、活動期間中にも転勤による人の入れ替わりがあった。発案者のT氏自身がフィリピンに異動した。しかし、後任の駐在員が業務を引き継ぐようにねぶたの仕事も引き継ぎ、支障なく準備が進んでいった。実行委員会にはこのほか、新一世や日系三世の方々も加わり、それぞれの得意分野の仕事をこなしていった。

ねぶた実行委員会をバックアップしたのが、さまざまな日系・日本系組織である。後援団体として、在ロサンゼルス日本国総領事館、南カリフォルニア日系企業協会（JBA）、日本貿易振興機構（JETRO）、国際交流基金、国際観光振興機構（JNTO）、Little Tokyo Business Association（LTBA）、在南加青森県人会、南加日系商工会議所（JCCSC）が名を連ねた。

このうち南カリフォルニア日系企業協会⁽¹⁸⁾、南加日系商工会議所⁽¹⁹⁾、Little Tokyo Business Association⁽²⁰⁾の3団体からは、会頭や適任者が実行委員となり、所属企業にねぶたへの協賛依頼をするなどの後援をした。個人的なつてを使っての後援も多かった。

在南加青森県人会は、1983年創立という新しい団体で、現在は42名が会員である⁽²¹⁾。ねぶた公演に際しては、前日の歓迎会開催、ハネトへの参加、一般ハネトの着付け、プレスリリース時の囃子演奏などの活躍があった。またサンフランシスコを中心とした在北カリフォルニア青森県人会からもハネト参加があったという。

3.3 さまざまな準備

ロサンゼルスねぶた実行委員会の活動の中から、実現までの試行錯誤を取り上げてみよう。

表 4 スポンサー協賛カテゴリー

スポンサー・カテゴリー	協賛金	協 賛 特 典	企業数
ゴールド・スポンサー（G）	\$10,000	企業名入り行灯のねぶた前面または左・右面への取り付け	10
シルバー・スポンサー（S）	\$5,000	企業名入り行灯のねぶた後面への取り付け	12
ブロンズ・スポンサー（B）	\$2,000	企業名入り提灯のねぶたへの取り付け	25
レギュラー・スポンサー（R）	\$1,000	ポスター・ウェブサイトへの企業名記載	21
カーテシ・スポンサー（C）	\$500 以下	ウェブサイトへの企業名記載	14
計			82

資金調達は協賛金を募集して多くをまかなった。表 4 のとおり、金額に見合う広告掲載を条件に、実行委員がつながりを持つ企業を中心に協賛金を募った。実行委員会の議事録を見ると、会議を開催するたびにその時点での不足額が示され、いっそうの努力が促されている。一時は資金にめどが立たず、中止を決断する瀬戸際まで追い込まれたというが、そこからの奮起により見事目標額を得ることができた。具体的な不足額を見ると、3 月半ばには 13 万ドル、4 月上旬には 6 万ドル、5 月上旬には 3～4 万ドル、そして 6 月下旬に「予算総額に近づいてきた」。この間、駐在員たちは日頃の業務で関係のある企業に働きかけ、協賛金を募っていった。最終的に、協賛スポンサーは 83 団体に及んだ。協賛金のほかに現物供与も数多くあった。こうして 34 万ドルにふくれあがった経費（表 5 参照）を無事に調達することができた。

次に、ねぶたや太鼓を載せる台車については、青森からの資料に基づきロサンゼルス側で製作す

ることになった。ねぶたの台車は、青森では木製で、毎年ねぶたの前に部品を組み立て、終わると解体している。しかしロサンゼルスでは 1 回限りの使用のため、部材を捨てることになる木材の使用を止めて鋼鉄製とし、ローズボウルパレード等のフロートを作る会社に発注した。ねぶた終了後は他のパレード等で再使用されるはずである。太鼓の台車は、実行委員が現地で経営する会社で製作した。青森から入手した資料は、メートルを単位として大きさを表記しているが、アメリカではインチに換算する必要があった。製作自体はさほど問題なく進んだが、路上を搬送する際の高さ制限があり、台車の上部にヒンジをつけて折りたためるようにした。また、ねぶた台車に積み込む発電機を購入したものの、電圧は 120 ボルト仕様であり、日本で 100 ボルト仕様に作られたねぶた用には変圧器が必要になった。

ねぶたの海外遠征では、現地の法律等に合わせるための工夫が必要になる。今回は消防に関する規制をクリアするためにさまざまな工夫があった。

ロサンゼルスでねぶたを運行するためには、紙と構成部材に不燃処理をする必要があった。このため、ねぶたの和紙に不燃材を吹き付けることを検討したが、色あせの心配があるため無理と判断した。そこで和紙には不燃処理せずに消防の許可を得るためにさまざまな工夫をした。まず、ねぶたの装飾に用いる布について、スプレーで不燃材を吹き付け、難燃処理を施した証明書を発行した。また、消火器を持ったスタッフをパレード時にねぶたと共に歩かせ、さらには異常事態発見のためにモニター数人を配置することとした。

表 5 ねぶたロサンゼルス公演総経費

項 目	金額（ドル）
ねぶた製作費	96,979
輸送費	54,142
ねぶた小屋費	8,600
PR 関係費	23,025
運行費	28,169
旅費交通費	72,977
諸経費	56,228
合 計	340,120

青森から運んだねぶたを組み立てる場所は、Centenary United Methodist Church の庭を借りることになった。この教会は、E. Third St. と Central Av. の角という、リトルトーキョーの東南隅にあり、日系人コミュニティにとって重要な施設の一つである。教会は制作スタッフの昼食や休憩の場も提供し、今回のねぶた公演に全面協力した。制作期間中は、教会の信者だけでなく、さまざまな人が制作過程を見に集まり、マスコミの取材もここで行われ、宣伝の拠点となった。

青森ねぶたには欠かせないハネトは、300 名を募集した。実行委員会が web ページで呼びかけて参加を募ったほか、青森県人会が参加し、さらに日本からのツアー客も加わった。ハネトには青森から取り寄せた衣装を用意し、青森と同じような雰囲気盛り上げることとした。

ハネトの中には、徳島県人会の阿波踊り連「徳島連」⁽²²⁾ も加わった。パレードの際には、まず自団体の出番で阿波踊りを披露してコースを一周し、その後 5 分で着替えてハネトに参加という活躍ぶりであった。

ハネトの集合場所及び着替え場所としては、リトルトーキョーの東、Hewitt St. にある曹洞宗の寺、禅宗寺を借りることができた。

また、運行に携わるボランティアも募集した。駐在員の多いトランスから来るボランティアには、送迎のバスまで用意した。

広報活動は、ノウハウを持つ駐在員が中心となり、さまざまな場でプレスリリースを行った。7 月 15 日に二世ウィークのプレスリリースがあり、日系メディアに対してはここから広報活動を開始した。米系メディアには、8 月 2 日に総領事の全面協力を得て、総領事公邸でプレスリリースを行った。この時は青森県人会の協力で、囃子の実演を行って臨場感のある演出をした。こうして、ねぶた運行に向けて雰囲気が高まっていった。

4. 青森側の準備

青森側は、青森観光コンベンション協会が交渉の窓口となった。2006 年秋には実施の可能性が

高くなったことから、10 月に 3 名をロサンゼルスに派遣し、事前視察を行った。

そして 12 月には、観光コンベンション協会の正副会長会議と理事会でねぶた派遣を承認した。これを受けて「青森ねぶたロサンゼルス公演実行委員会」が、県、市、商工会議所、観光コンベンション協会を中心に組織され、名誉会長に市長、会長に商工会議所会頭、実行委員長に観光コンベンション協会長という布陣で運営に当たることになった。

ここで青森側の事業計画がほぼ固まった。同実行委員会規約に「第 2 条 目的」として「実行委員会は、2007 年 8 月、米国ロサンゼルス市において開催される『二世ウィーク』へ青森ねぶたを派遣し、日米の文化交流による国際親善に資するとともに、ビジットジャパンキャンペーンとの連動のもと、魅力あふれる日本・東北はもとより、東北新幹線青森駅開業を迎える青森県、青森市の観光 PR を行い、新たな観光客誘致を目指す」と謳っているように、ねぶたを派遣するとともに青森の観光 PR、観光客誘致を行うこととしたのである。

これに先立ち、ロサンゼルスに派遣するねぶたの制作者が竹浪比呂兵に決定した。竹浪はまだ 47 歳ながら、ねぶたの歴史に残る名作をいくつも制作し、多くの賞を受賞した、青森を代表するねぶた師の一人である。竹浪は毎年 3 台のねぶたを制作しているが、2007 年はロサンゼルス派遣ねぶたが加わり、4 台を並行して制作することになった。

竹浪は 10 月のロサンゼルス事前視察に参加し、ロサンゼルス側から「サムライ」を希望すると要望が出たのを受けて、題材に武田信玄を選んだ。川中島の合戦で、軍配を持って手を広げ、上杉謙信を待ち受ける姿を制作した。

しかし、制作にあたってはさまざまな困難が待ち受けていた。派遣ねぶたは青森と同じく、幅 9 メートル、奥行 7 メートル、高さ 5 メートルの規格ではあるものの、分解して船で輸送するためコンテナの容量に限りがある。このためねぶたの「容積」という点で制限が厳しいものとなった。

今回は武田信玄一人を大きく作る「一人ねぶた」であるが、竹浪がこれまでに制作した一人ねぶたは、主人公の回りに龍を配すことが多く、龍の迫力と独特の構図、そして手の込んだ装飾が特徴であった⁽²³⁾。ところが、今回は龍などの造形を輸送する余裕がなかった。また、ねぶたの照明には電球だけでなく蛍光灯も使い、刀や波など、白く表現したい部分を照らす。ところが今回は、日本とアメリカの電圧が違うこと、輸送中に破損した場合、日本と同じ蛍光灯をアメリカで入手できるとは限らないことから、万一を考えて蛍光灯を使わずに制作した。

このため、完成したねぶたは、サムライなら持つ日本刀を持たず、竹浪が得意とする龍もつけず⁽²⁴⁾、複雑な構図や華麗な装飾を一切排し、武田信玄が軍配を持ち両手を大きく広げて相手を睨むというシンプルな構図の、電球だけで照らすねぶたになった。単純な構図であるだけに、人物の表現、特に迫力のある表情をうまく描けるかどうかで出来栄が決まるように思われた。だが、完成したねぶたは非常に迫力のあるもので、また、右手に軍配を持ったために手が長く見え、結果的に体が大きく見えるという効果もあった。竹浪の制作歴の中でも特筆すべき作品に仕上がった。

ねぶたは4月17日に完成、試験点灯し、その模様が報道された。その後9分割されてコンテナに積み込まれ、6月4日に八戸港を出港してアメリカに向かった。

ねぶたの運行を指揮する責任者は扇子持ちと呼ばれる。扇子持ちは、手に持つ扇子の合図で引き手にさまざまな指示を出し、引き手の疲労を考慮しつつもねぶたを生き活きと動かし、沿道の障害物を回避する。扇子持ちの力量によりねぶたの印象が変わるといわれるほど重要な役である。ロサンゼルスで指揮を執る扇子持ちには櫛引淳治が選ばれた。櫛引は、運行団体「サンロード青森」の扇子持ちで、現役では有数の名手とされる。また運行団体協議会の事務局長を長く務め、ねぶた全体を熟知していることから、遠征の適任者とされた。

5. パレード

5.1 組立作業

8月14日、ねぶた師とスタッフの一行6名がロサンゼルスに到着した。翌15日、ロングビーチの倉庫に保管されていたねぶたが組立場所である教会に運び込まれた。

ねぶたは針金と紙で出来ているため、輸送時に破損しやすい。しかし今回はほとんど破損もなく、すぐに組立作業に入ることができた。青森では、雨を避けるため屋根のある小屋を作り、その中で制作する。ところがこの時期のロサンゼルスでは雨の心配がないため、夜露対策のためリフト5台でブルーシートを持ち上げ、屋根代わりにしただけで済ませた。

ねぶた制作スタッフは、18日までの4日間で9つに分割されたねぶたを接合し、内部の電気配線をつなぎ、ねぶたを載せる台車を飾り付け、広告を取り付ける準備をした。変圧器の調子が悪く、100ボルトになるはずの電圧が90～95ボルトに下がってしまう点を除けば、作業は順調に進んだ。17日夜には、夕食後誰が言うともなくねぶたを見に集まった関係者の前で、台車に乗せる前のねぶたに点灯した。ねぶたに初めて灯が入った、関係者一同感激の瞬間であった。

18日昼には、ねぶたを台車に乗せる「台上げ」を行った。台上げ直後、出来上がったねぶたをバックに、国際交流基金主催によるねぶた師の講演が行われた。集まったアメリカ人187名に対し、ねぶた師の竹浪比呂央が青森ねぶたと今回の作品について日本語で講演し、実行委員会スタッフが通訳した。活発な質疑応答があり、アメリカ人の関心の高さを感じさせられた。台上げ後は広告や提灯を取り付け、飾りの幕を張るなど、運行に向けて最後の仕上げを行った。

この間、17日に青森コンベンション協会のスタッフ6名が到着した。ねぶた制作作業を手伝うとともに、二世ウィークのイベントの1つであるTofu Festivalに、青森を含む北東北の観光PRブースを出展した。同じ日に囃子方12名も到着

した。先に述べた観光PRブースで1時間に1回演奏するとともに、パレードで使用する大太鼓などを準備し、空き時間にはねぶた制作や台上げを手伝うなど大忙しであった。17日夜には、ホテルニューオータニで実行委員会主催による歓迎会が行われ、ロサンゼルスと青森の関係者が一堂に会して交歓した。また、ロサンゼルス在住の青森県出身者から囃子方への参加希望があったため、オーディションを行った結果3名が参加することになった。

18日には、青森から役員団が到着した。メンバーは青森市長、市議会議長、青森県観光局長、青森観光コンベンション協会会長、青森商工会議所副会頭ほか13名である。役員団はねぶた運行への参加だけでなく、終了後各地で表敬訪問やトップセールス、観光PRを行った。18日夜には青森県人会による歓迎会があった。

また、制作現場では地元マスコミによる取材もあった。新聞では*Los Angeles Times*、羅府新報、テレビではFOX 11、JATNなどの取材がこの場で行われた。

5.2 ねぶた運行

19日はいよいよパレードの日である。ねぶた本体はすでに前日に準備を終えていたが、夜に緊急事態が発生した。ねぶたの幅が教会の門よりわずかに広いため、このままではねぶたが門から出られないことが判明したのである。実は、実行委員会ではこの事態を事前に想定し、ねぶたを4つの小型台車に載せ、横向きに動かして出すつもりでいた。ところが前日の運行打ち合わせで青森側関係者から、ねぶたを小型台車に載せて動かすと転倒の恐れがあり危険と指摘された。このため門の柵を一部切断するしか出す方法がなくなった。そこで18日夜に教会の牧師に許可を求めた。教会からは、「ねぶたのためなら」と快諾が得られた。そこで早朝に柵を切断し、窮地を脱したのであった。

午後3時半、教会ではねぶたの引き手が集まり、扇子持ちの指導の下に練習をした。引き手は現地で募集したボランティア50名である。全員初体

験であるが、扇子持ちの合図でねぶたを引き、止め、上下に動かし、回すという動作をマスターした。

一方、ハネトの着替え場所である禅宗寺には、2時頃から現地で募集したハネトが続々と集まり始めた。受付で「万一怪我をしても訴えない」という主旨の合意書に署名し、衣装を受け取ると、男女別に分かれて着替えをした。青森県人会と、青森から来た囃子方が着付けを手伝った。ハネトの人数は、現地募集の224名に、青森からのツアーでハネトに参加した26名が加わり、総勢250名にも及んだ⁽²⁵⁾。

午後6時半、禅宗寺に関係者がすべて集まり、出陣式が行われた。まずはハネトの練習が始まった。青森出身でロサンゼルス在住の女性が講師役を務め、跳ね方を実演した。引き続いて実行委員長、青森市長の挨拶があり、全員で気合いを入れ、教会前へ移動した。

いよいよねぶたが出発する直前にトラブルが起きた。ハネトを照らす照明の発電機がどうしても動かない。そこで急遽、パレードを終えて戻ってきた別の団体から発電機を借りて急場を凌いだ。そして8時前にスタート場所へ向けて移動を開始した。

パレードはCentral Av.との交差点からE. Second St.を西に進み、Los Angeles St.を北上、今度はE. First St.を東に進んで、最後はCentral Av.を南下してスタート地点に戻るといって、1.2キロメートルのコースで行われた(図1)。ねぶたは参加70団体の最後で、1時間半かけて夜のリトルトーキョーをゆっくりと一周した。

ねぶた運行は青森と同様に行ったが、青森での運行に比べて時間に余裕があるため、ねぶたを左右に向けたり回したり、たっぷりとその魅力を見せることができた。物凄い歓声とフラッシュの光に迎えられ、役員団を先頭に、ハネト、囃子、そしてねぶた本体がゆっくりと進んでいく様子は、沿道の観客に強烈な印象を残したようだ。

スタート地点に戻ったねぶたはしばし休息。関係者は大仕事を成し遂げた感動に至福の一時を過ごした。やがて、囃子方の演奏する戻り囃子に送



図1 ねぶた運行コース



写真1 リトルトーキョーを行くねぶた

られて教会に戻ると、ねぶたはただちに解体された。解体後はホテルで打ち上げ会が盛大に行われた。

翌朝、教会に集まった関係者は、ねぶたの主要部分を日米文化会館前に運んだ。ここにねぶたを1週間展示して、二世ウィークの残る会期中、大いに雰囲気盛り上げた。夜には青森側主催の経済交流会があり、今回の企画の成功を、青森、ロサンゼルス双方の関係者一同で喜び合った。

6. ねぶたの残したもの

ねぶたが参加した今回のパレードは、二世ウィークのパレードとしては異例の高評価を受けた。前評判も高く、見物客は1万5千とも2万とも言われ、例年になく多かった。当日のパレードを見ることができず⁽²⁶⁾、翌日以降に日米文化会館を訪れた者も多い。

パレードの様子を報じた記事を紹介しよう。まずロサンゼルスの日語新聞『羅府新報』は次のように報じている。

「戦国絵巻から今にも飛び出しそうな武将・武田信玄。千両役者のねぶたは、軽快な囃子の太鼓と笛、鉦の音、三百人が乱舞する跳人を従え、ゆらゆらと前後に揺れ、くねりながら進んだ。何度も回るパフォーマンスを見せて沿道の見物客を魅了した。『活性化』と叫ばれ続けて久しい小東京。日曜日の夜は、閑散としている。しかし、この夜は違った。内部からの照明効果で美しい輝きを放ったねぶたが、まさに『闇夜の提灯』となり、『リトル東京を元気にした』。ねぶた効果で、近年まれにみる約一万五千人の見物客で賑わった。わずか一時間という、実に短い晴れ舞台のために、二年という準備期間と約四十万ドルという巨費を費やしたが、数字では決して表すことができない多くの感動を与えた」。(『羅府新報』2007.8.30)

また、南加日系商工会議所の会頭であるとともに青森県人会事務局長である若尾龍彦は、次のよ

うな記事を寄稿している。「青森から取り寄せたハネトの衣装をまとめて申し込み、大勢の会員がハネトとなってねぶたを楽しんだ。『練習のときは3分も持たなかったけれど、本番でお囃子を聴くと勝手に体が踊りだし疲れを覚えなかった。あとで筋肉痛が起こるかもね』、『親子で参加できるなんて最高。これからも親子間の共通話題として続き我家の宝となるだろう』、『まさかねぶたをロスアンゼルスで経験するなんて思わなかった。これでいつ死んでも構わない』など、各人の興奮と感激が伝わってくる。青森県人会の皆さんだけではない。沿道には1万5千人とも2万人ともいわれる例年の数倍の観衆が詰めかけ熱気が伝わってくる。敬老ホームからバスを仕立ててやってきたおじいちゃんおばあちゃんたち、興味津々のアメリカ人の家族、フロートが進むにつれてあちらでもこちらでもフラッシュが閃く、ベテラン扇子持ち・櫛引さんの見事な指揮でねぶたは一条乱れず右に左に、上へ下へとその巨体を動かす。要所要所ではぐりと廻って見物客を喜ばす」。(若尾2007:7)。いずれもねぶたが多くの観衆を集め、人気を博したことを伝えている。

なぜねぶたはロサンゼルスで高い評価を得ることができたのであろうか。

まず第1に、ねぶたは青森市から来たが、青森というよりも日本の伝統文化として評価された。二世ウィークという、日本文化の表出を目的としたイベントに日本代表として登場したことにより、祭りの主役となり得た。そして、二世ウィークの観客に対し、日本文化を強くアピールすることができた。

第2に、日本文化ということとは別に、ねぶたという灯籠が優れた光の造形として評価を得た。評価を得た理由は、ねぶたの「迫力」にある。人間をかたどった造形は、優れた出来であれば、その感情表現を誰でも理解しうるであろう。見る者は誰でも圧倒するだけの迫力を、今回の作品は表現し得たのである。

また、今回のねぶたは、青森と同じサイズの大形ねぶたであった。どんなに優れた造形であっても、小さいと美しくはあっても迫力は半減してし

まう。巨大な顔が高い位置から見下ろしたからこそ、観客の受ける印象はさらに強烈なものになったのであろう⁽²⁷⁾。

第3に、青森ねぶたは単に灯籠が静かに運行するのではなく、鉦、太鼓、笛からなる囃子が伴う。特に迫力のある太鼓の低音、鉦の金属音が雰囲気盛り上げた。さらにハネトが「ラッセラー」というかけ声を懸けながら跳ねた。こうした音の演出も、観客に好評を博した点であろう。

今回のねぶた遠征は、何を残したのであろうか。

第1に、これは関係者内部の評価であるが、今回の企画は、実行委員会に集まった駐在員、新一世と日系社会との間の関係を強化した。こうした集団間には必ずしも交流があるわけではないことはすでに述べたとおりである。今回の企画では、共同で困難な作業を成し遂げる過程を通じ、相互の交流が深まったことを多くの関係者から耳にした。

11月16日には、実行委員長を務めた池井宗之が総領事表彰を受けたが、その理由の1つがねぶた誘致の功績であった。その部分を総領事館のホームページでは次のように記している。

「同氏は、ロサンゼルスねぶた祭り実行委員会会長として、16の小委員会を設け、月例の委員会を開催し、本場の青森ねぶた祭りの視察、青森市長表敬等を行い、2年間に亘り、卓越した指導力を発揮し、詳細かつ入念な準備を行ってきた。同氏は、本年8月の『ねぶた祭り』の『二世週日本祭』への誘致により、約2万人という予想を超える観客動員数をもたらしたほか、青森市長、ねぶた制作者、祭り参加者等約100名が当地を訪問した。リトル東京を中心とした日系アメリカ社会と当地に進出している日系企業の駐在員等の在留邦人の絆が強化される上で、関係者の多くが資金面、物資面で協力、ねぶた運行に係るボランティアとして参加したことで、非常に多くの成果をもたらした」⁽²⁸⁾。

第2に、青森県人会がねぶたをきっかけに活動を活発化した。二世ウィーク終了後、青森県人会

ではねぶた囃子保存会を立ち上げたという。そして、今回着用したハネト衣装を活用し、来年の二世ウィークに、ねぶたはないものの、ハネトと囃子で参加を計画している〔若尾 2007: 7〕。また徳島県人会でも、ねぶたが出ない来年は「阿波踊りで500人集めよう」と活動が盛り上がっている。

今回の企画は新一世を中心とする永住者たちが、県人会活動を活発化させるきっかけになった可能性がある。南川文里は、1900年代に一世が結成した県人会を「移民の日常生活の問題に対処するような社会福祉的・慈善的な性格を持った組織」であるとともに「県人という関係性は、移民起業家を金融面からも支えた」と、一種の「社会的資本」として捉えている〔南川 2007: 58-61〕。現在の県人会は、そういった機能を備えるよりも、ピクニックなどの親睦行事を中心とした団体になっているようである⁽²⁹⁾。こうした団体が、「日本の祭り」ではなく「故郷の祭り」を通じてさらに結集を強めていくことになる。

第3に、今回の二世ウィークはねぶたの影響で、例年以上の観客を動員した。インターネット上で二世ウィークの感想を記した日本語ブログを検索したところ、「見るのは久しぶり」「20年ぶりに見た」などの声をいくつか発見した。こうした観客の声をどの程度一般化できるかは不明だが、久しぶりに見た二世ウィークを再評価した観客は、今後も二世ウィークに関心を持つに違いない。

第4に、ねぶた誘致委員会が最初に掲げた目標「リトルトーキョーの活性化」についても、一定の効果があったものと思われる。若尾龍彦は「例年の数倍の観衆がねぶたに熱狂した。いつもは閑散とし、早く店仕舞いをするレストランがお客で賑わい、やがて用意のご飯が切れて隣の店に借りにいったという逸話が伝わるほどである。翌日も翌々日も町のあちこちで、また他のイベント会場でも市議員がねぶたの興奮を語っていた。今年のねぶたはそれだけのインパクトをロサンゼルスに与えてくれた」〔若尾 2007: 7〕と述べている。この効果が一過性のものに終わってしまうのか、それとも持続性のあるものになるのかは、現時点では判断が難しい。

なお、日系人社会が受けた影響についてはまったく調査が及んでいない。また二世ウィークパレードという日系人の「新伝統行事」⁽³⁰⁾がどのような内容で構成され、どのような変遷を経て今日に至り、どのように日本という文化表象を扱っているか、今回は明らかにし得なかった。こうした点を次の課題とし、今後とも変遷を見守りたいと考えている。

《注》

- (1) 調査は2007年8月17日から21日まで、ねぶた師・竹浪比呂央氏への同行取材という形で行った。竹浪氏のほか、青森・ロサンゼルス双方の実行委員会を初め、取材にご協力いただいたすべての方々に、この場をお借りして御礼申し上げたい。
- (2) 青森ねぶた祭の概説書としては〔宮田・小松2000〕が詳しい。同書には筆者も執筆者の一人として参加し、戦後のねぶたの変化について記述した〔阿南2000〕。
- (3) ちなみに県内主要都市のねぶたを見ると、弘前市では人形の形をした「組ねぶた」は少なく、扇形の行灯に武者絵などを描いた「扇ねぶた」が主流である。また黒石市は、形態は弘前風の扇ねぶた、青森風の人形ねぶたの双方あるが、やや小ぶりで、人形ねぶたは3～5段の高欄の上に載せるのが特徴である。五所川原市では、1996年までは小型の組ねぶたが10台ほど出るだけであったが、1997年に制作された高さ22メートルの「立佞武多」が瞬く間に行事の中心となり、他都市にはない「高さ」が特徴になった。
- (4) 大型ねぶた以外に、地域ねぶたや子どもねぶたと呼ばれる小型のねぶたを、町内会、子ども会、幼稚園などが思い思いに制作、運行している。従って、頂点にある大型ねぶたを支えるねぶたの裾野は非常に広い。
- (5) この点については〔阿南2000〕〔阿南2003〕で考察した。
- (6) ねぶたの遠征については、1999年までの分を〔阿南2000〕にまとめた。本稿の記載もそれに基づいている。
- (7) アメリカ西海岸の日系コミュニティでは、一世とは単に移民第一世代を表す言葉ではなく、19世紀後半から1924年の移民法成立までの40年ほどの間に移民した人々を指す。そのアメリカ生まれの子が「二世」、孫が「三世」である〔安藤2000：235〕。
- (8) こうした「非移民」として滞在する若者たちの社会学的研究として〔南川2005〕がある。
- (9) 山田礼子は、ロサンゼルス日本人・日系人を

対象とした研究で、駐在員、日系移民、新一世などの永住者の関係を分析している。それによると、駐在員と日系移民はそれぞれのコミュニティを形成しているが、永住者は集団というよりは個々のネットワークで活動する場合が多い。駐在員と日系移民の連携はJBA（3.2を参照）などの利益団体に主導されている。永住者は相互に相克の関係にあり、駐在員や日系移民とは個人的ネットワークによってのみ関係している〔山田2005〕。

- (10) 1986年に、E. First St. 北側の13の建物が、再開発以前のリトルトーキョーの姿を留める唯一の地区として、National Historic Landmarkに登録された〔杉浦1998：899〕。
- (11) 町村敬志は、日本企業の本拠地が集中しているトランスとその周辺を、日本企業の城下町と表現している〔町村1999：217〕。
- (12) 英語での行事名はNisei Week Festivalであり、「二世週祭」と訳されることもあるが、本稿では通例に従い「二世ウィーク」と表記する。
- (13) 主催者webページを基に作成した（<http://www.niseiweek.org>）。
- (14) パレード当日に沿道で配布された一覧表を基に作成した。
- (15) 北米の日系人社会で、太鼓が「日系文化」として浸透しつつあることについては、寺田〔2002〕に詳しい。
- (16) ねぶたの主催団体は青森ねぶた祭実行委員会である。事務局は青森観光コンベンション協会に置かれており、対外的な折衝はここが担当する。
- (17) サンフランシスコで開催される「北カリフォルニア桜祭り」を調査した佃陽子は、実行委員会において日本人と日系人が小委員会を分担する分業システムを取っていることを紹介し、文化と言語の違いを活かして助けあうためには分業システムが非常に有効としている〔佃2005〕。
- (18) 日本からの進出企業を中心に約500社で構成された経済団体である（同協会のwebページによる。<http://www.jba.org>）。なお、本稿では触れないが、教育支援活動として、駐在員の子弟の教育にも取り組んでいる点に特徴がある〔町村1999〕。
- (19) 南カリフォルニアのもう一つの日系商工団体で、地元日系企業を中心とした組織である。1949年に設立され長い歴史を誇る。現在は法人157社、個人106名が加入している（同協会のwebページによる。<http://www.jccsc.com>）。新一世や日系人が中心である点が特徴である。
- (20) リトルトーキョーの自営業者や企業など130人からなる団体である。1959年から現在の形になったが、前進は1890年に結成されたJapanese Association of Los Angelesに遡るという、歴史の古い組織である（同協会のwebページを参考にした。<http://www.visitlittletokyo.com>）。日本語では小東京実業組合と呼ばれる。

- (21) 青森県環境生活部国際課の web ページにある「ばーちゃる県人会 — 県人会紹介」(<https://www.pref.aomori.jp/kokusai/community/virtual/index.html>)を参考にした。
- なお、南カリフォルニアでは1900年代に次々に県人会組織が誕生する。しかし青森県人会はその時点では結成されなかった。1918年の「羅府日本人会南加州在留日本人人口調査」は、都道府県別人口を掲載している。そこには25都府県が掲載されているものの、青森県の名はない[南加日系人商業会議所1956:368]。青森県からの移住者は当時ほとんどなかったであろう。
- (22) 徳島県人会は、1991年にロサンゼルスで開催された徳島物産展に徳島から阿波踊り連が来たのをきっかけに設立されたといい、カリフォルニアの県人会の中では非常に新しい。2005年に新会長が就任してから県人会の中に「徳島連」が発足し、阿波踊りが盛んになった。二世ウィークだけでなく各種イベントに年間20回ほど出演という、県人会の中でも突出した活動を始めた。また、南カリフォルニアにある42県人会が「南加県人会協議会」に加盟し、協力関係にあった。こうしたことから実行委員会から参加依頼があったという(現会長のご教示による)。
- (23) 竹浪比呂史の龍を配した一人ねぶたとしては、「天空翔龍呂洞賓」(マルハ, 1997), 「森山弥七郎信真青森開港」(青森菱友会, 1998), 「龍飛の黒神」(青森菱友会, 2002), 「素戔鳴」(マルハ, 2004)などが代表的なものである。
- (24) 武田信玄という題材からすると、龍ではなく虎をつけたくなるところである。実際、ねぶたの後面である「送り」には虎を描いた屏風を配した。
- (25) 人数は青森側の実行委員会が終了後に発行した「青森ねぶたロサンゼルス公演事業報告書」による。また、ハネット以外にも、青森のねぶた運行団体関係者がツアーに参加しており、自団体の衣装を着てねぶたの前を歩いたり、囃子方を手伝ったりした。
- (26) パレードの翌日、日米文化会館の前でねぶたを見に来た日本人にインタビューしたところ、パレードを見なかった理由として、郊外に住んでいるため、駐車場の不足しているリトルトーキョーに車で行くのを諦めたとする者が数人いた。
- (27) 観点はやや異なるが、国際交流基金からボランティア参加した職員は、同基金のブログ「地球を開けよう」に掲載した体験記の中で「スケールが大きくて、賑やかで楽しいことが大好きなアメリカ人には殊のほかねぶたはアピールしたようです」と、ねぶたのスケールの大きさを成功の原因に挙げている(<http://d.hatena.ne.jp/japanfoundation/20070906/p1>)。
- (28) 在ロサンゼルス日本国総領事館のホームページから引用 (<http://www.la.us.emb-japan.go.jp/>

[web/m03_04_48.htm](http://www.la.us.emb-japan.go.jp/web/m03_04_48.htm))

- (29) 青森県人会の場合、主な活動として、新年会、ピクニック、釣り大会、野球観戦、ワイナリー巡り、等が挙げられている (<https://www.pref.aomori.jp/kokusai/community/virtual/page9.html>)。
- (30) サンパウロの日系人の祭りを研究する根川幸男は、ゲストであるエスニック・グループの母集団の「伝統」に準拠、あるいはその一部を取り入れながら新たに再編・創出され、ホスト社会に側にも認知された行事を新伝統行事と呼んでいる[根川2006]。

参考文献

- 阿南透 2000「青森ねぶたの現代」宮田登・小松和彦編『青森ねぶた誌』青森市, pp.251-295
- 阿南透 2003「青森ねぶたの現代的変容」『国立歴史民俗博物館研究報告』103, pp.263-297
- 安藤幸一 2000「アメリカにおけるエスニックコミュニティの形成 — 三世によるサンフランシスコ日系コミュニティ再生運動」『大手前大学社会文化学部論集』1, pp.233-248
- 北脇実千代 2004「二世クィーン・コンテストにみる日系アメリカ人のエスニック・アイデンティティ」『移民研究年報』10, pp.59-75
- 杉浦直 1998「文化・社会空間の生成・変容とシンボル化過程 — リトルトーキョーの観察から」『地理』71A-12, pp.887-910
- 滝田祥子 2005「新旧移民をつなぐ人々 — 在日コリアンと日系アメリカ人の事例を通じて」『移民研究年報』11, pp.3-20
- 佃陽子 2005「日系コミュニティの将来 — 日本人と日系人の交流を通じて」『移民研究年報』11, pp.81-98
- 寺田吉孝 2002「タイコによる伝統の創造 — 日系アメリカ人の新しい音楽」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院, pp.205-228
- 南加日系人商業会議所 1956『南加州日本人史』南加日系人商業会議所
- 南加州日本人七十年史刊行委員会編 1960『南加州日本人七十年史』南加日系人商業会議所
- 根川幸男 2006「マルチエスニック都市サンパウロにおける『日本文化』の表象 — 東洋街における新伝統行事を中心に」『平成16~17年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書・現代ブラジルにおける都市問題と政治の役割』pp.129-140
- ハルミ・ベフ 2002「変貌するリトルトーキョーと二世ウィーク」ハルミ・ベフ編『日系アメリカ人の歩みと現在』人文書院, pp.159-173
- 町村敬志 1999『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社

- 町村敬志 2003「ロスアンジェルスにおける駐在員コミュニティの歴史的経験——『遠隔地日本』の形成と変容」岩崎信彦他編『海外における日本人、日本のなかの外国人——グローバルな移民流動とエスノスケープ』昭和堂, pp. 170-185
- 南川文里 2005「現代社会における見えざる移住者——ロスアンジェルス在住日本人若者層の非合法就労とステイタス」『神戸外大論叢』56-2, pp. 111-131
- 南川文里 2007『「日系アメリカ人」の歴史社会学——エスニシティ、人種、ナショナリズム』彩流社
- 宮田登・小松和彦編 2000『青森ねぶた誌』青森市
- 山田礼子 2005「トランスナショナル化する駐在員家族——ロサンゼルスに駐在員家族を事例に」『移民研究年報』11, pp. 21-42
- 米谷ふみ子, イチロウ・マイク・ムラセ, 景山正夫 1987『リトル・トウキョー 100 年』新潮社
- 若尾龍彦 2007「ねぶたで燃えたロスアンゼルス」『あおり国際交流つうしん』86, p. 7